

赤阪くんにつまわる3つのエピソード

1 エピソード 1

2年生の赤阪くんは中間考査をナメてかかり大失敗した。

特に数学の点数がシケシケ・・・

「この問題集さえなければ・・・この問題集さえなければ・・・」

目の前の4STEP問題集に敵意を感じて、おもむろにページを折り始めた。

勉強机の前に富士山の写真があった。

「正純、富士山のように日本一の男になるんだぞ」

と亡き父が息子の将来を期待して、無理やり貼った写真だった。

「ああ、富士山に登りたいなあ。日本一の山に登れば僕も人生をやり直すきっかけになるのになあ・・・」

何度も何度も、問題集を折り重ねるうちにある考えが頭をよぎった。

「このまま折り続けるとどうなるんだろう・・・」

4STEP問題集は200ページ(紙100枚)あたり約1cmだから、紙1枚の厚みは約 $\frac{1}{100}$ cmである。



問題 4STEP問題集を何回折れば富士山の高さに到達できるのだろうか？

- (ア) 30回くらい
- (イ) 300回くらい
- (ウ) 3000回くらい

赤阪くんは4STEP問題集を踏み台にして、富士山登頂を達成した。

「パパ、やったよ。僕は日本一の男になったよ・・・期末考査は頑張るからね」

天国の父に、富士山頂から涙ながらに誓った赤阪くんであった。(感動のシーン)



2 エピソード 2

中間考査で大失敗した赤阪くんだったが、無事に富士山登頂の成し遂げた後、心機一転、勉強に励み期末考査で大躍進した。あまりの好成績に母親も大喜びである。

母親「正純、よくがんばったわねえ。ご褒美にお小遣いをあげちゃうわ。好きな金額を言いなさい。100万円でも、200万円でも良いわよ。」

赤阪くん「ありがとう、ママ。でも我が家の経済状況を考えると、そんな大金もらえないよ。今日は1円でいいよ。でも、明日は2円、明後日は4円、その次の日は8円・・・と、前の日の倍を次の日にもらうということで、1ヶ月だけちょうだい。そしたら一生お小遣いなんていらなからね。」

母親「えっ、そんな少なくていいの？ この子はなんて謙虚な子なのでしょう(涙涙・・・)。あの人に似て立派に育ってくれたわ。母さんはうれしい。」

息子の謙虚な申し出に天国の夫に感謝する母親であった。

「フッフ・・・引っかけたな。ママは指数関数の恐ろしさを知らないからな。指数関数は期末考査の試験範囲だったんだよ。」

一人、部屋でニヤつく赤阪くんであった。(ちょっとワルな感じのシーン)



問題 赤阪くんは1ヶ月後までに、総額いくらお小遣いをもらうことができるか？

- (ア) 100万円くらい
- (イ) 1億円くらい
- (ウ) 10億円以上

3 エピソード3

母親から膨大な小遣いをいただき、夏休みに海外で豪遊する赤阪くん。

「ハハハ・・・僕は大金持ちなんだ。なんでも買ってあげるよ。」

そのあまりの羽振りの良さが周囲の友人の反感を買うことになる。

「赤阪のやつ、ちょっと調子に乗り過ぎやな・・・」

ある人が赤阪くんの悪い噂を流そうとして、5人にメールした。

「あのね、実は、赤阪くんがね・・・」

これを聞いた5人が、それぞれ10分後に、それぞれまた別の5人にメールした。

「あのね、実は、赤阪くんがね・・・」

こうして、噂は瞬く間に広がっていった。



問題 1時間後には何人くらいが噂を知ることになるだろうか？

- (ア) 約200人
- (イ) 約2000人
- (ウ) 約20000人

このままだと、大変なことになりそうだ。なんとか噂を止めないといけない。

問題 では、2時間後には何人くらいが噂を知ることになるだろうか？

- (ア) 奈良県の人口くらい(約140万人)
- (イ) 日本の人口くらい(約1億2000万人)
- (ウ) アメリカの人口くらい(約3億2000万人)

4 エピローグ

噂が噂を呼び大変なことになってしまった。

「いったい誰がこんな噂を・・・」

そういえば国語のテストで「悪事千里を走る」ということわざが出題されていたことを思い出した。

これは「悪い噂は千里先(約4000km)まで伝わる」という意味だ。

「しまった・・・国語も勉強しておくべきだった・・・」

赤阪くんは、国語はまだ勉強不足だったのだ。

時すでに遅し。でも、そもそもの原因は自分にあることを悟った赤阪くん。

「指数関数で喜び、指数関数に泣いたな・・・指数関数ってコワイな」

これからは堅実にまじめに生きようと心に誓った赤阪くんだった。人生そんなに甘くない。 完

